

東日本大震災復興支援プロジェクト

第21回活動報告



2年前、多くの人達の命が奪われた南相馬の沿岸部。がれきの残る防波堤に立ち祈りを捧げました。

思い出もすべて消されようとしている町。
抵抗する人々と動物たちに出会いました。

大震災から2年となる3月9日、「福島第一原発事故被災地を訪ねる活動」を実施しました。主催したのは当JAの40周年記念事業にもなったわらび座公演の実行委員会。実行委員長である今野組合長の呼びかけに応え、協賛10団体から43人が参加しました。当JAからも、復興支援プロジェクトのメンバーや女性部役員ら14人が参加しています。

一行は福島県南相馬市の沿岸部と、居住ができないためゴーストタウン化してしまっている小高区の住宅街、浪江町の牧場を訪れ、テレビや新聞では報じられない被災地の現状を目の当たりにした他、鶴岡で避難生活を続けている星見英朝さん（経理システム課）と「希望の牧場」の吉沢正巳さんの講話を聞き入り、それぞれが自分にできる支援とは何かを考える一日となりました。

復興支援プロジェクトでは、宮城県東松島市を中心に、来年度も継続した支援活動を予定しています。





放射性物資を含む餌で生き続ける牛たちは、「希望の牛たち」と名付けられました。

原発事故の影響で警戒区域に指定されている福島県浪江町と、南相馬市の堺にあるエム牧場では、今もなお350頭を超える牛たちが生活しています。牛たちは、被ばくした餌を食べて生き延びている状況です。

敷地内の放射線量を測定すると、10μシーベルトを超える危険な値。しかし、ここで場長を務める吉沢さんも、自身の被ばく覚悟でこの地に残り、牛たちとの暮らしを続けています。

吉沢さんは原発事故以来、東京を中心に全国各地で福島の実状を訴えてきました。

「国は、牛を殺処分することで放射能汚染の現状を覆い隠そうとしている。そんな都合で、家族同然の牛

たちを殺すことなんて絶対にできない。残りの人生をすべてかけて、国や東電と戦いながら福島の実状を訴えていきたい」と涙ながらに語ってくれました。

テレビでは報じられない牧場の噂は広がり、牛の身体と放射能汚染の因果関係を調査しようと、全国の大学が調査に乗り出し始めています。またこの日は、ブラジルのテレビ局が取材に訪れていました。

「夢は、数十年後になろうともこの牧場を復活させること。それまでは、多くの方々にここを見に来てもらいたい」

震災後に『希望の牧場』と名付けられたこの地では、新しい命も誕生していました。



涙ながらに言葉を繋ぐ吉沢さん。



セシウムを含む餌で必死に生き延びる牛たち。新しい命も。